

## 冷戦下の「反核・平和主義」と「加害」の前景化

——一九八〇年代におけるテレビの「八月ジャーナリズム」——

米 倉 律

### 1. はじめに

日本では、広島、長崎に原爆が投下された八月六日・九日、そして終戦記念日の八月一五日を中心に、新聞やテレビが戦争関連の記事や番組を集中的に報道することが慣例化し、「八月ジャーナリズム」と呼ばれてきた。<sup>(1)</sup>「八月ジャーナリズム」は、一九五〇年代前半に新聞とラジオによつてその原型が形成された。<sup>(2)</sup>一九五三年に放送が開始されたテレビにおける「八月ジャーナリズム」は「戦後二〇年」の節目の年にあたる一九六五年に本格化し、それ以降、現在までに数多くの特集番組、関連番組が制作・放送されてきた。<sup>(3)</sup>本稿の目的は、テレビの「八月ジャーナリズム」

の歴史のなかで、幾つかの点において「転換点」と特徴づけることができる一九八〇年代に焦点を当て、その展開と特徴、意義や問題点などを分析して明らかにすることである。

一九八〇年代は、内外の国際情勢が大きく揺れ動いた「戦後の転換期」と特徴づけられる。一九八一年に「強いアメリカ」の復活を掲げて誕生した米・レーガン政権は、ソ連を「悪の帝国」と名指ししてSDI（戦略防衛構想）を打ち上げ、一九七〇年代に緩和されていた東西冷戦の緊張が再び高まった（Ⅱ新冷戦）。しかし一九八五年にソ連でゴルバチョフが共産党書記長となってペレストロイカが始まると米ソは対話路線へと転換した。そして、その後のベルリンの壁崩壊（一九八九年）、ソ連解体（一九九一年）に伴って冷戦体制は急速に終焉していくこととなる。

日本国内では一九八二年に中曽根康弘内閣が発足、日米同盟の強化を掲げた中曽根首相は、有名な「不沈空母発言」や、戦後の首相として初めての靖国神社への公式参拝（一九八五年）などで、アジア諸国からの強い反発を招いた。また一九八〇年代は経済をめぐる内外の状況にも構造的な変化が生じた。一九八五年のプラザ合意によって急速な円高が進行すると、日本ではいわゆる「バブル経済」が発生、世界経済に占める日本経済の比重が一気に高まった。一九八八年には日本は、GNPが世界全体のGNPの約14%を占める経済大国となっていた<sup>③</sup>。そして、日本経済がこのバブル経済に踊っていた一九八九年一月、裕仁天皇が死去、戦前・戦中から続いた「昭和」が終焉した。一九八〇年代末から九〇年代初頭にかけて、東西冷戦と昭和とが同時に終焉したのである。

このように大きく揺れ動いた時代状況は、「八月ジャーナリズム」にもさまざまな形で影響を与えた。以下では、はじめに一九八〇年代におけるテレビ放送をめぐる状況とその中で「八月ジャーナリズム」の状況を概観し（二節）、次に「八月ジャーナリズム」のなかでも主要なカテゴリーである原爆関連の番組が一九八〇年代における冷戦

や核開発競争という国際情勢の中でどのようなテーマを扱ったのか、その傾向や変化の諸相を明らかにする（第三節）。そして、第四節では、上述のような歴史教科書問題や靖国参拝問題などにおけるアジアからの対日批判を契機として「八月ジャーナリズム」において、従来取り上げられることの少なかった日本のアジアに対する「加害」の問題が次第に前景化していったプロセスについて分析する。

## 2. テレビの「成熟期」と「八月ジャーナリズム」

### (1) テレビの成熟期と「報道の時代」

テレビ史における一九八〇年代は、テレビの「成熟期」として位置づけられる。一九六〇年代半ばから始まったカラーテレビの普及は、七〇年代前半に急速に進展して七五年には九〇%を越え、八〇年代に入るとほぼ一〇〇%に達する（八四年〓九九・二%）。一九七九年にはゴールデン・タイムの総世帯視聴率がテレビ史上のピーク（七七・八%〓ビデオ・リサーチ関東地区）を記録する。広告媒体としてもテレビは急速に存在感を増していく。戦後長らくトップを占めてきた新聞に代わって一九七五年には媒体別広告費でテレビがトップに立ち、以後八〇〓九〇年代にかけてその差は拡大を続けていくことになる。<sup>(4)</sup>

「メディアの王様」などと言われるようになったテレビは、とりわけバラエティ番組やドラマなど娯楽のジャンルにおいてその黄金時代を作り出した。一九八〇年〓八二年、フジテレビ『THE MANZAI』を契機に空前の「漫才ブーム」が起ると、『オレたちひょうきん族』（フジテレビ系列、一九八一〓八九年）、『笑っていいとも!』（フジ

テレビ系列、一九八二年（二〇一四年）などによって「お笑いブーム」が作られ、数多くの娯楽番組が制作されていた。<sup>⑤</sup>一九八〇年代にはドラマにおいても数々の記録が生まれた。NHKの「朝の連続テレビ小説」で『おしん』が一九八三～八四年にテレビドラマ史上最高となる平均視聴率五二・六％（最高視聴率六二・九％）を記録、また同じくNHKの大河ドラマでも一九八七年の『独眼竜正宗』が年間視聴率で三九・七％と歴代トップを記録した（次いで一九八六年の『竹田信玄』三九・二％）。

他方で、テレビの一九八〇年代は、民放を含めたテレビ各局がニュース・報道の分野にも力を傾注するようになって「報道の時代」と呼ばれた時期でもある。<sup>⑥</sup>民放各局は、一九八〇年を「報道元年」と位置づけ、『TV-EYE』（日本テレビ）、『報道特集』（TBS）、『ビッグニュースショー いま世界は』（テレビ朝日）などの大型報道番組を編成した。<sup>⑦</sup>その背景には第一に、NHKの『ニュースセンター9時』（一九七四年～）、『ニュースワイド』（一九八〇年～）というワイド型のニュースショー・情報番組の成功があったとされている。また背景の第二として、この時期にテレビ取材（撮影）・伝送機器の小型軽量化や高性能化、衛星伝送料金の低下などが進んだことで、これまで以上に機動的な取材や衛星を経由した生中継などが可能となって、同時性・速報性のある報道を展開しやすくなったという点もある。こうした中、一九八五年にはテレビ朝日が『ニュースステーション』を開始して多くの視聴者を獲得、以降、民放各局が夜の時間帯にニュース・報道番組を編成して「ニュース戦争」と呼ばれる状況となっていく。

## (2) ドキュメンタリーの増加・大型化と戦争の「歴史化」

次に八〇年代におけるテレビの「八月ジャーナリズム」の全体状況を概観しておきたい。表1は、テレビの戦争・

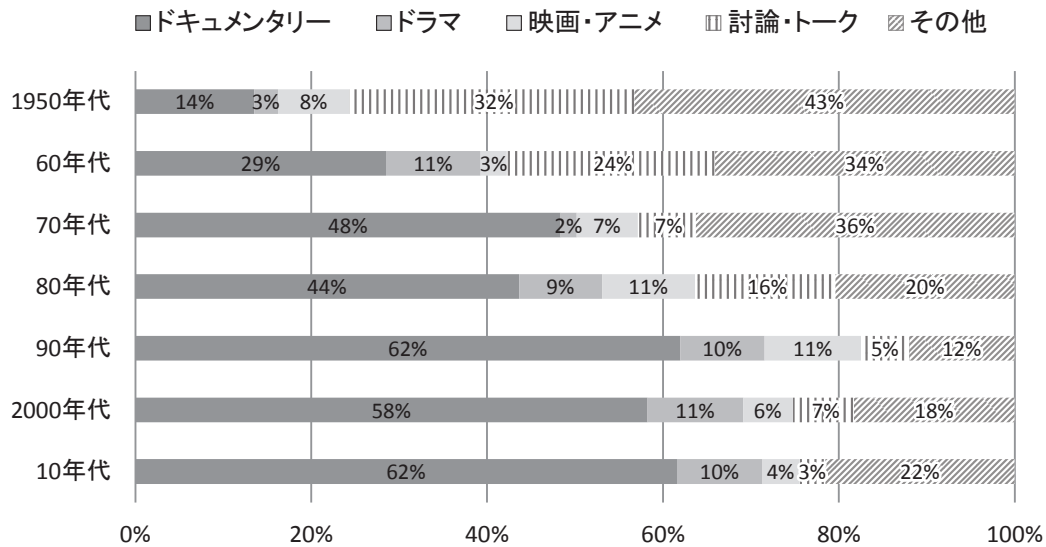
表 1. 年代ごとの戦争・終戦関連番組の本数推移  
(各年の八月前半)

|         | 全体   | 内訳  |     |
|---------|------|-----|-----|
|         |      | NHK | 民放  |
| 1950 年代 | 37   | 22  | 15  |
| 1960 年代 | 270  | 70  | 200 |
| 1970 年代 | 273  | 81  | 192 |
| 1980 年代 | 275  | 132 | 143 |
| 1990 年代 | 292  | 158 | 134 |
| 2000 年代 | 230  | 185 | 45  |
| 2010 年代 | 237  | 155 | 82  |
| 合計      | 1614 | 803 | 811 |

終戦関連番組（八月前半）の放送本数を一〇年区切りの年代別に示したものである（ドキュメンタリー、ドラマ、映画、トーク番組などすべてのジャンルの番組本数<sup>⑧</sup>）。一九六〇年代が二七〇本、以降、七〇年代、八〇年代と二七〇本台で推移し、「戦後五〇年（一九九五年）」の節目のあった九〇年代が二九二本と最も多く放送されている。八〇年代はそれに次ぐ本数（二七五本）であった。NHKと民放の内訳をみると、八〇年代～九〇年代を境に変化が起きている。すなわち、六〇年代、七〇年代と民放の（合計）本数のほうがNHKよりも大きく上回っていたのが、徐々にNHKが多くなって八〇年代にはほぼ拮抗している（NHK一三二本、民放一四三本）。そして九〇年代以降はNHKが本数では上回るようになって今日にまで至っている。

次に図1は、戦争・終戦関連番組の放送本数に占めるドキュメンタリー、ドラマ、トーク番組など番組ジャンル別の構成比を一〇年区切りの年代別に示したものである。これをみると、一九五〇年代、六〇年代には「討論・トーク」「その他」（平和祈念式典中継、ワイド型の番組、歌謡番組、分類不能など含む）の割合が高く、他方で「ドキュメンタリー」は少数だったことが分かる。ドキュメンタリーの本数が少ない背景には、そもそも一九五三年のテレビ放送開始から、テレビ・ドキュメンタリーという番組が確立されてNHK・民放各局が積極的に制作し始めるまでに時間を

図1. 戦争・終戦関連の番組ジャンル別の構成（10年毎）



要したという事情がある。定時放送としては初のドキュメンタリー番組であるNHKの『日本の素顔』の放送開始が一九五七年であり、民放では日本テレビ『ノンフィクション劇場』、TBS『カメラ・ルポルタージュ』がそれぞれ一九六二年にスタートしている。これらの番組では初期から戦争関連のテーマを扱っているものがあつたが、本数としては限られていたことがこうしたデータにも表れている。

他方、それまで数の少なかったドキュメンタリーが一九七〇～八〇年代以降に増加した背景には、戦争からの時間の経過に伴って戦争が「過去」のものとして「歴史化」されていったことも関わっていると考えられる。一九五〇年代、六〇年代は終戦から一〇～二〇年程しか時間が経過しておらず、人々の戦争に関する記憶は未だ生々しいものであつた。この時期に数多く作られた討論番組やトーク形式の番組には、戦争体験者が出演して戦争について証言していたが、彼らの多くはまだ若かつた。例えば、二〇歳で終戦を迎えた人であれば、一九五〇～六〇年代は三〇～四〇歳代である。彼らは、自らの戦争にまつわる体験・記憶を生々しく昨日のことのように語っていた。また、彼らに質問する番組司会者やアナウンサーも自身が同世代として様々な戦争体験を持って



表2. ドキュメンタリー番組1本  
あたりの平均時間量（分）

|        |      |
|--------|------|
| 1950年代 | 31   |
| 60年代   | 33.9 |
| 70年代   | 43.2 |
| 80年代   | 53.9 |
| 90年代   | 60.8 |
| 2000年代 | 60.9 |
| 10年代   | 57.4 |

いることが多く、戦争体験者同士ゆえの深い理解や共感を伴ったやりとりが可能であった。しかし、七〇年～八〇年代になると、終戦から三〇～四〇年の時間が経過して戦争体験者は高齢化していく。そして、番組制作者たちのあいだでは戦後生まれ世代が多数派となり、戦争を「過去」のものとして検証したり掘り下げたりする傾向が強まってくる。そうした変化も、討論・トーク番組よりもドキュメンタリー番組が増加していった背景にあると考えられる。ドキュメンタリー番組にも戦争体験者は登場するが、彼ら・彼女らは過去の歴史的事実を証言する高齢の「証言者」としてインタビュウの形で登場することが多くなっていく。このように、終戦からの時間の経過とともに、戦争体験は過去の「記憶」として歴史化されていき、歴史化された戦争について様々な角度から検証したり光を当てたりする番組としてドキュメンタリー番組が増加し、「八月ジャーナリズム」の主流を占めるにいたったのである。

ドキュメンタリー番組については、本数が増加したという点以外に、番組の長時間化という傾向が顕著になっていった点も八〇年代の特徴として挙げられる。表2は「八月ジャーナリズム」におけるドキュメンタリー番組の一本あたりの平均時間量を年代別に示したものである。一九五〇～六〇年代では一本平均三〇分程であったのが、時代が下るにつれて徐々に長くなり、八〇年代は五三・九分、九〇年代、二〇〇〇年代には六〇分を越えている。この背景には、ドキュメンタリー番組の大型化がある。その代表的な例がNHKの『NHK特集』である。NHKは、一九七六年に『NHK特集』をスタートさせる。報道局、番組制作局など組織の壁を越え

たプロジェクト方式の制作体制を採用したこの番組は、ゴールデン・タイムに週一回、一九七八年からは週二回の放送という、五〇分の大型ドキュメンタリー番組としては異例の編成となった（八〇年代後半は週三回<sup>9</sup>）。『NHK特集』は、『NNNドキュメント』（日本テレビ系列）、『報道特集』（TBS系列）と並んで「ドキュメンタリー御三家」などと呼ばれ、NHKの看板ドキュメンタリー番組となっていた。『NHK特集』はまた、戦争・終戦関連のテーマも積極的に取り上げることで、「八月ジャーナリズム」のなかでも重要な役割を果たしていた。特に九〇年代以降の「八月ジャーナリズム」においては、『NHK特集』の後継番組である『NHKスペシャル』（一九八七年～）が質量ともに「八月ジャーナリズム」の中心的番組となっていたと言っても過言ではない。『NHKスペシャル』は一本の標準的な長さが四九分であるが、戦争・終戦関連では六〇分～七〇分以上など、一本あたりの長さが長いものも少なくない。また、民放もドキュメンタリー番組の本数こそ九〇年代以降減少してきたものの、戦争・終戦関係では特別番組（スペシャル番組）として「長尺もの」のドキュメンタリーを制作することが多い。このようにドキュメンタリー番組が、特に八〇年代以降長時間化していくなか、「八月ジャーナリズム」においても戦争・終戦についてより深く、詳細に掘り下げていくような番組が増加していくことになった。

### 3. 反核・平和主義と「八月ジャーナリズム」

#### (1) 原爆関連番組の系譜

それでは、一九八〇年代の「八月ジャーナリズム」においてドキュメンタリー番組をはじめとするテレビ番組は、



戦争についてどのようなテーマを扱っていたのだろうか、そこにはどのような傾向や特徴があったのだろうか。本節では、「八月ジャーナリズム」の中でも最も多く取り上げられてきた原爆関連のテーマをめぐる状況を中心に分析する。

広島・長崎に投下された原爆関連のテーマは早い段階から取り上げられてきた。例えばNHKが、八月六日に広島で開催される平和祈念式典の模様を中継放送する番組を始めたのは、一九五三年のテレビ放送開始から五年後の一九五八年である（『特別番組「ひろしま」<sup>⑩</sup>）。そして翌一九五九年には、八月前半に放送されたテレビの戦争・終戦関連番組あわせて一四本のうち広島原爆関連のテーマを扱った番組が九本（NHK四本、民放五本）に上っていた。以降も年によって違いはあるものの半数以上が原爆関連の番組である年も珍しくない。原爆はテレビの「八月ジャーナリズム」においては最もメジャーなテーマであり、その傾向は基本的に現在でも変わらない。

ところで、筆者は「八月ジャーナリズム」において新聞記事や放送番組が戦争・終戦をどのように語ってきたのかについて別稿で分析・検討し、三つの「語り」に類型化できることを明らかにした。<sup>⑪</sup> 第一は、戦争で日本・日本人が受けた大きな被害の側面に焦点化し、「受難」の経験としての戦争（終戦）を語る「受難の語り」、第二は、戦後の日本の歩みを「民主主義」や「文化的成熟」などの観点から自己査定・自己省察する「戦後史の語り」、第三は、国土と国民に甚大な被害を出して敗戦し、戦後に固く不戦を誓った日本には国際社会のなかで「平和国家」として果たすべき重要な役割があるとする「平和主義の語り」である。この三つの「語り」は、一九五〇年代に新聞とラジオで始まった「八月ジャーナリズム」において形成され、その後現在に至るまで「八月ジャーナリズム」の主流を占める基本的な「フォーマット」のようなものとなっている。またこのうちの「受難の語り」が「八月ジャーナリズム」の主

表 3. 各年の八月六日に放送された原爆関連の番組（平和祈念式典中継など除く）

| 年    | 局     | 番組種別     | 時間量 | 番組タイトル                                |
|------|-------|----------|-----|---------------------------------------|
| 1980 | NHK   | ドキュメンタリー | 50  | ドキュメンタリー「爆心地のジャーナリスト」                 |
| 1981 | NHK   | ドキュメンタリー | 49  | ドキュメンタリー「爆心地のカルテ」～広島原爆病院              |
| 1982 | NHK   | ドキュメンタリー | 78  | NHK 特集「きみはヒロシマを見たか・広島原爆資料館」           |
|      | テレビ東京 | ドキュメンタリー | 54  | 金曜スペシャル「原爆記念日特集・37年目の秘録 TV 初公開」       |
| 1983 | NHK   | ドキュメンタリー | 75  | 中継ドキュメンタリー「爆心地の夜」—ヒロシマ・昭和20年8月6日      |
| 1984 | NHK   | ドキュメンタリー | 50  | NHK 特集「世界の科学者は予見する・核戦争後の地球② 地球凍結」     |
| 1985 | NHK   | ドキュメンタリー | 75  | NHK 特集「爆心地・生と死の記録」                    |
| 1986 | NHK   | ドラマ      | 60  | ドラマ「ふたたびの街」                           |
| 1987 | NHK   | ドキュメンタリー | 40  | ドキュメンタリー「ひろしま・古いゆく日々」                 |
|      | 日テレ   | ドラマ      | 85  | 原爆記念日特別アンコール「黒い雨・姪の結婚」                |
| 1988 | NHK   | ドキュメンタリー | 45  | わが心のニッポン「あるマレーシア人被爆者の青春」              |
| 1989 | NHK   | ドラマ      | 90  | NHK スペシャル「失われし時を求めて・ヒロシマの夢」           |
|      | 日テレ   | ドキュメンタリー | 55  | ドキュメント 89「語り継ぐ戦争①未来への墓標・アウシュビッツとヒロシマ」 |
|      | テレビ朝日 | ドキュメンタリー | 45  | 朽ちてなお…いま、ドームが語る                       |

流を占めるという傾向も、当初から現在まで一貫して変わっていない。<sup>(12)</sup>そして、ここで検討している原爆関連番組の殆どは、「受難の語り」の典型例であると言える。それらは、被爆地広島・長崎が被った甚大な被害の実相、被爆者たちの悲惨な運命、生き延びた被爆者たちの戦後の生活などに焦点を当てたものだからである。

八〇年代に制作・放送された原爆関連番組においてもその基調に変わりはない。八〇年代の一〇年間に放送された原爆関連番組は、平和祈念式典中継などを除いてドキュメンタリーとドラマをあわせると四〇本である。このうち広島について取り上げた番組が圧倒的に多く三七本、長崎を取り上げた番組は四本（うち一本は広島・長崎をあわせて取り上げていた）であった。表3はその中から各年の八月六日（広島原爆の日）に放送された一四本を示したものである。この一四本の中でも多くは、被爆の悲惨な実相や生き残った被爆者の苦難の人生を描いた「受難の語り」に該当する番組である。

例えば、『ドキュメンタリー「爆心地のカルテ」』（NHK、一九八一年）は、広島赤十字病院で新たに発見された「被爆直後からの数万枚に及ぶというカルテをもとに被爆当時の惨状や医療活動、さらにカルテによって結ばれた医者と患者の記録を追い、広島原爆病院の現在の姿を通して、原爆医療の三六年の姿を浮き彫りにする」<sup>(13)</sup>という番組であった。また『NHK特集「爆心地・生と死の記録」』（NHK、一九八五年）は、広島への原爆投下当時、爆心地から半径五〇〇メートル以内にいたとされる約二万一〇〇〇人の中で奇跡的に生存していた人が五六人いたことがその後の調査によって判明、彼らの証言をもとに、原爆投下直後の爆心地の状況や彼らがなぜ生き延びることができたのか、その後の身体的・精神的な影響などについて明らかにするという内容の番組であった。<sup>(14)</sup>『ドキュメンタリー「ひろしま・老いゆく日々」』（NHK、一九八七年）は、広島市内の中心部に近い場所ながら比治山の影にあったために原爆による壊滅的な被害を免れた段原地区に生きる人々を取り上げた番組である。番組は、同地区で戦後四〇年にわたって被爆者たちの治療や健康管理にあたってきた中山広実医師、そしてその妻で地区の民生委員を二〇年間務めて、一人暮らしの老人や生活に困窮する被爆孤老の相談相手になってきた武子夫人にスポットを当て、「夫婦と被爆者との交流を中心に、四〇年間にわたる人間的きずな」を描いた。<sup>(15)</sup>

原爆関連番組ではドキュメンタリーと同様に、ドラマもほとんどすべてが「受難の語り」に該当する。八月六日放送のドラマに限っても『原爆記念日特別アンコール 黒い雨・姪の結婚』（日本テレビ、一九八七年）は、井伏鱒二の小説をドラマ作品化したもので、被爆者たちの日常生活の中の苦悩を描いたものである。主人公は、被爆者の夫婦とその姪である。姪は直接的には被爆していないが、原爆投下後に降った「黒い雨」に打たれた経験があるために、「ピカに遭った」という村の人々の噂によって彼女の縁談が次々と破談になってしまい、夫婦がそれに頭を悩ませるとい

うストーリーである（主演…森繁久彌、中井貴恵）。この作品は、第二二回ギャラクシー賞、プラハ国際テレビ祭のドキュメンタリードラマ部門視聴者賞を受賞するなど内外で高く評価された（一九八三年八月二〇日に放送されたものの再放送<sup>16</sup>）。また『NHKスペシャル 失われし時を求めて・ヒロシマの夢』（NHK、一九八九年）は実話を元にしたドラマで、被爆直後の広島で見た悲惨な光景と原爆症の恐怖から逃れられず、一二年もたった昭和三二年に自殺を図ってすべての記憶を喪失した中年男性が、次第に記憶を取り戻していく姿を描いた作品であった（脚本…早坂暁、出演…小林稔侍、榎山文枝、五月みどりほか<sup>17</sup>）。

## （2） 原爆関連番組と平和主義思想

こうして広島・長崎への原爆投下を題材にした多数の番組が、「八月ジャーナリズム」のなかで繰り返し制作され放送されてきたことにはどのような意義があるだろうか。第一に挙げられるのは、原爆による未曾有の被害という広島・長崎の経験を広く共有するとともに、世代を超えて原爆に関わる記憶を継承してきたという意義であろう。その被害が余りに甚大かつ悲惨なものであったうえ、戦争終結にとっても大きな意味をもった広島・長崎への原爆投下は「国民的記憶」となって戦後長きに渡って受け継がれてきたと言える。広島・長崎への原爆投下については、終戦直後から原民喜『夏の花』（一九四七）、大田洋子『屍の街』（一九四八年）、峠三吉『原爆詩集』（一九五一年）、そして井伏鱒二『黒い雨』（一九六六年）などに代表される文学作品、中沢啓二『はだしのゲン』など漫画やアニメ、『原爆の子』（新藤兼人監督、一九五二年）、『ひろしま』（関川秀雄監督、一九五三年）、『黒い雨』（今村昇平監督、一九八九年）といった映画など、様々なメディア、作品によって描かれてきたが、テレビや新聞の「八月ジャーナリズム」もまた、多く

の人々の原爆についての認識や記憶の形成に大きな役割を果たしてきたと考えられる。

第二に、原爆関連番組は、被爆者の経験を通して原爆（核兵器）と放射能の恐ろしさを伝え、二度と同じ惨禍を繰り返してはならないという反核・平和主義の形成にとつても大きな意味を持った。先述のように原爆は、一九四〇～五〇年代にかけて新聞やラジオにおいて「八月ジャーナリズム」が形成された当初から最も頻繁に扱われたテーマであったが、その頃から、原爆については単にその惨禍や悲劇性が焦点化されていただけではなかった。被爆者が、核兵器の廃絶を希求していること、二度と戦争のない平和な世界の実現を訴えていることを伝え、「唯一の被爆国」としての日本は核廃絶にむけて積極的に役割を果たしていくべきだというメッセージを含む記事や番組も多かった（『平和主義の語り』）。

例えば、戦後一〇年にあたる一九五五年八月六日の朝日新聞・社説「原爆十周年に想う」は、「きょう、われわれは原爆十周年をむかえた。十年前の八月六日は、生きた人間の頭上に、はじめて、あのおそろしい原子破壊がもたらされた日である。この日にあたって、広島、長崎の幾十万の原子犠牲者の霊に、厳粛に思いをささげたい」と書き始めた後、「反戦、平和の世論」が世界的に高まっていることを指摘し、「原爆の唯一の体験者である日本人は、破壊的戦争を阻止する権利というより、むしろ人類にたいしてその義務をもっている」と主張していた。そして同日の夕刊では、五万人が集まった平和祈念式典で「真実の世界平和が恒久的に打ち立てられるのを見るまではわれわれは全世界の人々にこの真実を伝えることを大きな義務と考え、『広島悲劇を再び繰り返すな』と叫び続けるものである」という広島市長の「平和宣言」の内容を伝えている。また、この年に第一回目の「原水爆禁止世界大会」が開催され、「原水爆の脅威について」「原爆の実相について」「原水爆禁止のための対策と運動」という三つの議題について国内



外から集まった二千人が討議したことも併せて伝えている。周知のように原水爆禁止運動はその後、日本国内においては社会党系の原水禁（原水爆禁止日本国民会議）と共産党系の原水協（原水爆禁止日本協議会）とに分裂して別々の運動体となったが（一九六〇年代前半）、両者がそれぞれ消滅することなく日本における反核・平和運動の基盤となっていた。<sup>18</sup>

もちろん、原爆関連番組に代表される「受難の語り」が、戦争における日本・日本人の「被害」の側面を焦点化することで、逆に「加害」の側面を後景化し忘却させる機能を果たしてきたことは無視されるべきではない。広島は原爆投下によって夥しい被害を生み出したが、同時に広島は、明治期以来の「軍都」であり、鎮守府や海軍工廠のあった呉や海軍兵学校のあった江田島などを含めて一帯が戦前の日本の一大軍事拠点であった。従って広島は単に「悲劇と犠牲」の都市であるのではなく、日本のアジア侵略や加害の歴史と深い関わりを持っているが、メディアにおける原爆をめぐる「語り」においては、広島のそうした側面が触れられることは滅多にない。しかし究極的な「受難」ともいえる被爆体験の悲劇性とその記憶の共有が、日本において反核や反戦への原動力となってきたことも事実である。例えば橋本明子は、中沢啓二の自伝的漫画『はだしのゲン』について、同作は「被害者の物語」であり、それゆえの一面性を免れないとしながらも、それが学校の図書館や平和教育で多くの日本人に読まれ、またアニメ化・映画化されて多くの人々に視聴されることによって、日本社会のなかで「反戦の象徴」「反戦文学」としての役割を果たしてきたとして次のように言っている。

…広島は軍事都市でもあったのに、この作品は一五年戦争と原爆との関連性をあまり明確にしていない。また、



当時侵略をうけていたアジア諸地域では、日本に原爆が投下されたことを喜ぶ人が多かったということも読者には伝えていない（たとえば韓国では、この作品はほとんど読まれていない）。大枠としては、この作品は残酷な戦争の犠牲になった、主に日本人の物語であり、日本人の苦悩に焦点が絞られている。

『はたしのゲン』をはじめとする被害者の物語は、敗戦国の深い文化的トラウマとの親和性が強く、（反米感情ではなく）反戦感情を培うのには最適といえる。<sup>19</sup>

ジョン・W・ダワーも、日本における戦争に関する記憶を特徴づけるものが「被害者意識」であると指摘しつつ、それが日本人のあいだの独特の「反戦・平和主義思想」に結びついていると論じる。<sup>20</sup>ダワーが注目するのは、戦後の日本人のあいだでの「愛国精神」の低さである。ダワーが参照しているのは九〇年代後半に若者を対象として行われた調査結果であるが、多くの同種の調査が若者に限らず日本人全体の「愛国精神」の低さを示している。例えば、「世界価値観調査（World Values Survey）」によれば「もし戦争が起こったら国のために戦うか」という問いに対して「はい」と回答した割合は、調査の始まった一九八〇年代から一貫して最低レベルで推移しており、二〇〇五～二〇一〇年期では日本は一五・二％で世界七八カ国中最低である。<sup>21</sup>二〇一五年にWIN／ギャラップ・インターナショナルが世界六四カ国を対象に実施した調査においても、「自国のために戦う意志があるか」という問いに「ある」と回答した割合は日本が一一％で最低であった。<sup>22</sup>

他方でダワーは、日本人の多くがアジア太平洋戦争が日本による「侵略戦争」であったことを認めていることにも注目している。この点についても、これまでに多くの世論調査が行われている。例えばダワーが引用した一九九三年

の読売新聞の調査では、「第二次世界大戦で日本は侵略者だったか」という質問に対して、五三・一％が「はい」と答えていた（「いいえ」は二四・八％）<sup>(23)</sup>。また、NHK放送文化研究所が一九八二年と二〇〇〇年に実施した「日本人の平和観」調査でも、「日清戦争から太平洋戦争までの50年の日本の歴史は、アジア近隣諸国に対する侵略の歴史だ」という意見に対して「そう思う」と回答した割合は、一九八二年、二〇〇〇年ともに五一％であった（「そうは思わない」は一九八二〇・二％、二〇〇〇年一五・五％）<sup>(24)</sup>。このように多くの日本人の戦争に対する記憶が「被害者意識」を中心に形成されている一方で、アジアへの侵略や残虐行為などの戦争における「加害性」を多くの日本人が認識しているという状況を、ダワーは「記憶と認識の裂け目」と呼ぶ。そしてこの「裂け目」のゆえに、諸外国の人々から見ると日本人は「被害者意識」に捉われて戦争における自らの「加害性」を忘却しているかに見えるものの（『歴史的記憶喪失』、実際には戦後の日本人の戦争に対する記憶のあり方は「もっと複雑で入りくんで」おり、「万華鏡のように変幻自在」であるとダワーはいう。そして、先に見たような日本人の「愛国精神」の低さ、「自国のために戦う意志」の低さは、そうした日本人の戦争に対する複雑な記憶のあり方のひとつの現れであり、ダワーはそこに戦後日本独自の「反戦・平和主義思想」を見出すのである。

より説得力があり、日本人に浸透していたのは、日本人が、戦争それ自体の犠牲になったという意識、絶望的な「聖戦」に投げこんだ軍国主義指導者の愚行によって、さらに、洗脳されるがままに一般民衆が無知であったことによって、犠牲になったという意識だった。…（中略）…それは内面から噴きあげ、すぐに、ひろく受け入れられる一連の信仰箇条にかたまった。日本は将来、戦争に巻き込まれるようになってはならない。ふたたび欺

かれないようにすることが、理性的で開かれた社会をつくることになる。「平和と民主主義」にむけてそうした社会をつくることは、たんに国家の誇りと国際社会の尊敬をふたたび勝ちえることになるばかりではない。それはまた、生者が死者にたいし、彼らがむだに非業の死をとげたのではないことを保証する、想像しえる唯一の道なのだ。<sup>(25)</sup>

以上のように、ダワーの言うような戦後日本独自の「反戦・平和主義思想」には、戦争に関する日本人の複雑な記憶のあり方が深く関わっている。そしてそうした記憶の形成に、文学作品や映画、新聞、テレビなどのメディアが果たした役割は大きいと考えられる。テレビや新聞の「八月ジャーナリズム」における最も主要なテーマである原爆は、そうした複雑な記憶の中心軸であり続けてきたと言える。

### (3) 原爆関連番組と「反核」

しかし、一九八〇年代の「八月ジャーナリズム」のなかの原爆関連番組は、広島・長崎に投下された原爆の被害の実相を明らかにしたり、被爆者のその後の人生を辿るというような典型的な「受難の語り」に終始しただけではなかった。当時人々のあいだでリアリティをもって感じられるようになっていた米ソ超大国のあいだでの「核戦争」や「核の冬」を題材にしたものが扱われるようになったことも、この時期の原爆関連番組の特徴として挙げることができるとする。

冒頭でも触れたように、一九八〇年代は七〇年代に一時は緩和されていた東西冷戦の緊張が再び高まった時代で

あった。一九七六年のソ連による中距離弾道ミサイルの欧州・極東への配備、一九七九年のソ連によるアフガニスタン侵攻、それに対抗・抗議した西側諸国によるモスクワオリンピックのボイコット（一九八〇年）、強いアメリカの復活を提唱するレーガン政権の成立（一九八一年）、レーガン政権による新型INFの配備開始とSDI（戦略防衛構想）の発表（一九八三年）などによって米ソ間の緊張関係は極度に高まった。<sup>26</sup>世界の核兵器の数はピークの一九八〇年代半ばには六万発を越え、戦後地球上で行われた核実験は数千回に上っていた。そして、「核戦争」の危機が世界の多くの人々のあいだで現実感を持つて語られ、「核シエルター」が欧米諸国を中心にブームにもなった。アメリカの科学誌『原子力科学者会報』（Bulletin of the Atomic Scientists）が核戦争の切迫度に応じて設定する「終末時計」は、一九八四年に世界の終末までの残り時間を四分とした。米ソが初めて水爆実験に成功して核戦争の危機が高まった一九五三年に三分を指して以降では、最も終末までの残り時間が短くなった。

「八月ジャーナリズム」でも、この時期においては、現実味を帯びる「核戦争」の恐怖とそれを食い止める必要性への言及が頻繁になされている。例えば、一九八一年の「広島・原爆の日」の前日である八月五日の読売新聞「社説」は、米ソが「人類を何回も絶滅させるほどの核兵器を持ちながら、なお五年間に戦略兵器の核弾頭を四千個以上」増やしていることに触れて、核兵器をめぐる世界の状況が「急速に危険さを増し」「狂気をさえ感じさせる」と言っている。また、同年八月六日の毎日新聞「社説」は、米ソの軍拡競争を「悪魔的な核軍拡レース」と名付け、次のように書いている。

いまほど平和が不確かなものに思える時代があっただろうか。戦争抑止のために開発されたはずの核兵器とそ

の際限ない増加と拡散。世界はすでに広島を数秒のうちに破壊した原爆の百万倍に等しい破壊力を持つ核爆弾を保有しているという。だが、百万倍という数字は、正常な個人の想像の外にある。恐怖が大きすぎて、逆に恐怖が実感できなくなっている。あまりにも悪魔的であるがゆえに、悪魔の足音がかすんでしまっている。とりあえず、きのうもきょうも平和に過ぎたことが、平和の保証であるかのような錯覚のなかで、われわれは生きているのではないか。<sup>(27)</sup>

またこの時期、核戦争がひとたび勃発すれば地球環境に重大な影響を与える「核の冬」がもたらされるという予測が様々な形で提起されていた。その最も有名なものは、天文学者のカール・セーガンらの科学者グループが一九八三年に発表した研究報告であろう。その内容は、米ソ両国が保有する一万メガトンの核兵器を使用する全面核戦争が起きると、大量核爆発と火災によって噴き上げられた煙と粉塵が厚い雲を形成して太陽光線を遮る結果、北半球の中緯度地方が氷点下四五度という北極なみの寒さに襲われ、人類は絶滅の危機に直面するというものであった。<sup>(28)</sup> また、全米科学アカデミーの作業部会が一九八四年二月に発表した研究報告では、北大西洋条約機構（NATO）とワルシャワ条約機構の加盟諸国間で、世界の核兵器の半分にあたる二万五千発（六千五百メガトン相当）が使用される大規模核戦争が起きた場合、北半球では太陽光線の九九%以上が地上に届かなくなり、気温は三カ月以上にわたって零下一八度ほどに下がり、動植物は死滅すると予測された。<sup>(29)</sup>

テレビの「八月ジャーナリズム」でも、こうした「全面核戦争」や「核の冬」をテーマとして扱う番組がこの時期には相次いで放送されている。その代表的な番組が『NHK特集 世界の科学者は予見する・核戦争後の地球』



（二九八四年八月五日・六日）であつた。<sup>30</sup> この番組は、イギリスの核物理学者フランク・バーナビー博士がメインキャスター兼監修役を務め、米ソを含む一五カ国一二六人の科学者、専門家からデータの提供を受け、米ソが保有する核兵器の約二割にあたる一万発（五千メガトン）が全面核戦争で使用されたらどうなるのかという想定のもとに制作された。

第一部「地球炎上」（八月五日）では、広島型原爆の八〇倍に相当する一メガトンの核爆弾が、東京タワー上空二千四百メートルで爆発したときにどのような状況になるのかをシミュレーションして示した。一発の核爆弾で東京のよな巨大都市が瞬時に破壊され一千万人規模の犠牲者が出る様子が映像化された。そして全面核戦争に日本が巻き込まれた場合には、日本の人口の約八割が死亡、生き残った二割の人々も重篤な放射線障害で早晚死亡すると予測した。また、全面核戦争が起こった場合に、世界の主要都市も同様に壊滅的な被害を受ける様子をシミュレーション映像で描いた。第二部「地球凍結」（八月六日）では、全面核戦争が真夏の七月に起きた場合を想定し、「核の冬」が地球環境に与える中長期的な影響を描いた。核戦争の四〇日後、ニューヨーク、パリ、モスクワの気温がそれぞれ摂氏マイナス一五度、マイナス二〇度、マイナス三〇度になるという予測が紹介され、この「核の冬」が半年から数年間続くことによって多くの動植物が絶滅する様子が描かれた。番組の反響は大きかった。第一部の視聴率は二四・一％で、一九八四年度に放送された『NHK特集』一三八本のなかで第二位であつた。そしてNHK内に特設した四〇台の視聴者対応用の電話には、二日間で約七万件の電話がかかったという。また番組は、米PBS、英チャンネル4、仏TF1、西独ZDFなど世界各国の主要放送局で放送されたほか、イタリア賞や芸術祭賞など国内外で多くの賞を受賞した。<sup>31</sup>

この番組が放送された一九八四年八月には、このほかに英BBCが制作したテレビ映画『スレッズ (Threads)』がテレビ東京系列で放送されている（八月九日）。『スレッズ』は、NATO空軍基地のあるイギリスのシェフィールドを舞台に、米ソによる核戦争後に崩壊した世界における悲惨な状況を描いたもので、前年の一九八三年に米ABCが制作・放送したテレビ映画『ザ・デイ・アフター』としばしば比較される作品である。『ザ・デイ・アフター』も、やはり米ソ全面核戦争とその地球規模の影響をテーマにしたテレビ映画で、日本では一九八四年一〇月にテレビ朝日系列で放送され、さらに翌八五年の八月一日にも再放送されている。また、これらの番組の放送に先立つ一九八二年八月九日には『特別企画・公開ドキュメント「あなたは生き残れるか」』（テレビ朝日系列）が放送されている。この番組は「平和のために核は必要か」をテーマとした討論番組で、「今の東京に一メガトンの核爆弾が落ちたら」という想定ドキュメントや、作家・大江健三郎による広島・長崎の原爆集会のレポートなどが流され、それらを踏まえて田原総一郎、河野洋平、小田実らがスタジオで討論を行った（司会…筑紫哲也、竹下景子）。

このように一九八〇年代の「八月ジャーナリズム」における原爆関連番組では、「核戦争」や「核の冬」の恐怖を描くなどして、より直接的に「反核」や「核のない平和」をテーマとする番組が放送されるようになっていった。さらに一九八六年には、原発史上最悪のレベル7とされたチェルノブイリ原発事故が起こる。そして、それをきっかけとして放射能による環境汚染というテーマも「八月ジャーナリズム」の中に加わるが、そうした傾向が本格化するの是一九九〇年代に入ってからのことである。

#### 4. 前景化し始める「加害」

##### (1) 「加害の語り」の形成・定着

一九八〇年代の「八月ジャーナリズム」の特徴として、戦争における日本・日本人の「被害」を焦点化する「受難の語り」中心のあり方から、日本・日本人による特にアジア諸国に対する「加害」の側面を取り上げることが増えていった点も挙げられる。「八月ジャーナリズム」のなかで「加害」に関わるテーマが取り上げられるようになったのは一九七〇年代であるが、<sup>32</sup>そうした傾向が定着したのが一九八〇年代であった。

その直接的なきっかけとなったのは一九八二年の「第一次歴史教科書問題」であった。一九八二年六月二六日の新聞各紙の朝刊は一斉に、高校の歴史教科書における日本軍による中国・華北への「侵略」という表記が文部省の検定によって「進出」等に訂正させられたと報じた。実際には文科省の検定によって出されたのは強制力を伴う「修正意見」ではなく、出版社が改善に応じる強制力のない「改善意見」であり、検定後、実際に「侵略」の記述を「進出」に変更した教科書はなかった。<sup>33</sup>その意味ではこの報道は「誤報」であったが、文部省が「侵略」という表現を排除する教科書検定を一貫して行っていたのは事実である。<sup>34</sup>この報道にアジア諸国は敏感に反応した。中国共産党機関紙『人民日報』（七月二〇日）は「この教訓を銘記せよ」という論評を掲載、日本の文部省を厳しく批判、新華社（七月二三日）は、「こうした歴史の改ざんは日中共同声明と日中平和友好条約に違反する」と報道した。以降、中国は対日批判の一大キャンペーンを展開、韓国も新聞各紙が激しい対日批判の論陣を張った。こうしたアジア諸国からの批判を受け、同年八月二六日、宮澤喜一首相は談話を発表、「わが国の行為が韓国・中国を含むアジアの国々の国民に

多大の苦痛と損害を与えたことを深く自覚」し、教科書記述に対するアジア諸国からの批判に「十分に耳を傾け、政府の責任において是正する」として事態の収拾を図った。<sup>(35)</sup>

一九八〇年代には、首相・閣僚ら政治による靖国神社参拝も大きな議論の対象となった。戦後三〇年の節目にあたる一九七五年の八月十五日、三木武夫首相が戦後の首相として初めて靖国神社を参拝した。三木首相の参拝は「私人として」のものであったが、三年後の七八年八月十五日、今度は福田赳夫首相が「私人として」の参拝でありながら「内閣総理大臣」の肩書を記載した。同年一〇月、靖国神社はA級戦犯一四人を「昭和殉難者」として合祀した。一九八〇年十一月、鈴木善幸内閣は、①国務大臣としての資格で参拝することは、憲法第二〇条第三項との関係で問題がある、②そこで政府としては、国務大臣としての資格で参拝することは差し控える、という政府統一見解を定めた。<sup>(36)</sup> その鈴木首相も八一年は「私人として」、八二年は「公人か私人かの区別には答えず」参拝している。そして、「戦後政治の総決算」のスローガンを掲げて鈴木内閣の後を継いだ中曽根康弘首相は、一九八五年八月十五日、海外出張中の二人を除いた閣僚全員を引き連れて「公式参拝」に踏み切り、特に中国から強い反発を招いた。翌年以降の参拝を断念した中曽根首相は八六年九月、「A級戦犯合祀は侵略された相手側の国民感情を刺激する。私はあの戦争は侵略戦争だったと思っている」として太平洋戦争が「侵略戦争」だったという認識を示している。<sup>(37)</sup> 以来、首相・閣僚ら政治家による靖国神社参拝は常に国内外で大きな議論の的とされることになる。

このように、一九八〇年代に入って相次いで生じた歴史教科書問題や靖国神社参拝問題は、「八月ジャーナリズム」に変化をもたらした。例えば、一九八二年八月の新聞各紙は、歴史教科書問題や靖国神社参拝問題に関連する内外の動向を連日伝えるなかで、日本の「加害」の問題に多様な形で言及している。八月六日、広島・原爆の日の朝日新聞

の夕刊は、第一面で当日行われた平和祈念式典の模様を伝える記事に「軍靴の響きに警鐘」という見出しをつけ、「非核三原則を国是とし、平和外交に徹する」という首相メッセージに「耳を傾ける参列者の中に、朝鮮人と韓国人の被爆者たちもいる。この人たちは、いま、国際問題に発展した『侵略』を『進出』に書き直させた日本の教科書に、再び軍靴の足音を聞く思いだ、と語った」と書いている。そして「世界平和を願う『ヒロシマ』が、被害者の立場からだけでなく、加害者としてのわが国の『侵略』の歴史にどう答えるのか、祈りと反核運動の厚みが問われている」としている。朝日新聞はまた、長崎・原爆の日の八月九日には「特派員報告『加害者意識 忘れた日本 教科書検定に厳しい海外の目』という記事を掲載、反日感情が高まって反日集会や日本製品不買運動が広がっている韓国の状況に加え、シンガポールやフィリピンなど東南アジア諸国でも歴史教科書問題をめぐって対日批判が高まっている状況を伝えている。そして同記事では、歴史教科書問題についての西ドイツでの反応も紹介されている。その中では西ドイツ（当時）の有力紙・南ドイツ新聞が「日本は自分が原爆の被害者であったことを強調するのには熱心だが、同時に他国に対して加害者だったことは忘れている」「ヒトラーによるポーランド、ノルウェー、オランダ、ロシアその他に対する『侵略』という表現を使わず、『進出』とせよと——一体どんなことになるのか。さいわいドイツではこんなことは考えられない。」「自分たち自身も戦争の犠牲者だったというばかりで、忌むべき過去をきちんと清算しようとならない日本の体質は相変わらずのようである。」と報じていることが紹介されている。

「終戦の日（八月一五日）」の各紙も、それぞれ社説において歴史教科書問題や靖国神社参拝問題との関連で「加害」について踏み込んだ形で論じている。毎日新聞の八月一五日の社説「8・15とは何であったか 原点に立って平和戦略を持とう」は、次のように語り起こされている。



八月十五日——中国本土への侵略に始まる「十五年戦争」が終わった日。そして、何の罪もない一千万人以上のアジアの民衆を殺した侵略戦争、それを促した明治以降の帝国主義的發展などに象徴される「古い日本」を精算して決別し、平和な「新しい日本」に生まれ変わることを内外に誓った日である。：（中略）：日本人の戦争——敗戦体験は日に日に風化し、8・15から遠ざかっていく。原爆などの生々しい被害者体験は残っていても、アジアの民衆に対して犯した無数の加害体験はさつさと忘れ去り、思い上がってきたように思われる。8・15は日本人にとって「敗戦の日」だが、韓国人には「光復節」という独立記念日である。三十六年にわたる日本の植民地支配という苦しみから解放された日なのである。このことを知っている日本人はそれほど多くない。それは、加害者としての日本が被害者だった韓国人の痛みの深さに対して鈍感なことを物語るもの、といえようか。同じことは南京大虐殺についてもいえる。

そして、歴史教科書問題について「加害者と被害者の感情的な行き違いが表面化した」事案だとし、「古い日本との決別」だったはずの八月一日の意義を忘れて「古い日本に逆行しようとする事への警鐘」と受け止めるべきだと指摘している。また、読売新聞の八月一日の社説「アジアの心を理解しよう」も、「日本の戦争責任の重みを、アジアの諸国から改めて思い知らされることになった」と書き出して歴史教科書問題に言及しながら、「日本自身が原爆の被害者だったことを強調するが、他国に対して加害者だったことを忘れてはいないか」という批判にも耳を傾けなければならない、と記す。そして戦後生まれ世代が人口の五割を超えた今も「戦後」は終わっていないとして次のように書いている。

：「軍国日本」の侵略から、ひどい被害を受けたアジアの人達は、その痛みの記憶もまだ生々しく、決して忘れてはいなかった。戦後処理も済んではないことを、忘れっぽい日本人はこっぴどく気付かされる羽目になった。：（中略）：アジア諸国が批判しているのは、検定制度そのものではない。過去の侵略の罪過にまつわる表現を和らげさせようとする文部省の歴史感覚であり、それを密室で強制する制度の運営である。かねて、わが国の戦争責任追及のあいまいさは、ナチズムに対する戦後ドイツの厳しい姿勢と、対照して指摘されてきた。教科書検定も、日本政府の「歴史の改ざん」「戦争の美化」と受けとられ、過去の過ちを正そうとする気持ちの希薄さが非難を浴びている。

八月一五日付社説における「加害責任」への言及の変遷を時系列分析した根津朝彦は、「加害責任」への言及が少しずつみられるようになった一九七〇年～一九八一年の「模索期」に対し、一九八二年から九五年を「加害責任」への言及が活発化して定着した「定着期」と名づけている。<sup>38</sup>確かに七〇年代以前には限定的にしか見られなかった日本・日本人によるアジア諸国への「加害」に関わるテーマは、八〇年代に入って「八月ジャーナリズム」のなかでも次第に積極的に取り上げられるようになっていく。そしてそのことは、従来からの「八月ジャーナリズム」における「語り」の三類型、すなわち「受難の語り」「平和主義の語り」「戦後史の語り」に加えて、「加害の語り」という新しい語りが加わったことを意味していた。

## (2) テレビにおける「加害の語り」

ただし、「加害の語り」は一九八〇年代において急激に増加したというわけではない。特にテレビの「八月ジャーナリズム」においては、その本数は多くない。例えば「第一次教科書問題」をめぐる動向が活発に報道されていた一九八二年の八月（前半）において、「加害」の問題を扱った番組は、『ビッグニュースショー』（テレビ朝日、八月一日）、『報道特集 これが中国侵略、戦後初公開フィルムの証言』（TBS、八月一日）の二本のみである。<sup>39</sup>前者は、この年から終戦の日（八月十五日）が「戦没者を追悼し平和を祈念する日」という公的名称が定められたことを受け（四月二三日・閣議決定）、それが戦争で犠牲になった約三二〇万人の日本人を追悼する意味はあっても、「同じ戦争で殺された二千万ともいわれるアジアの人々については触れられていない」ことを問題とした番組である。番組は、中国、韓国、タイなどアジア諸国からの留学生三〇人をスタジオに呼び、彼らの声を聞きながら問題を掘り下げるというものであった。そして後者は、歴史教科書問題をめぐる内外からの批判を踏まえ、「昭和初期当時の日本の動きを記録したフィルムを公開、非常時から戦時体制へと移っていった背景を紹介しながら、教科書問題をめぐる問題点を考える」という番組で、特に満州事変や上海事変など日本の中国侵略がどのようなものだったのかを検証することに主眼がおかれていた。<sup>40</sup>

翌八三年以降も、「加害」をテーマとする番組の数は限られていた。表4は、戦後四〇年の節目にあたる一九八五年八月（前半）に放送された四三本の番組の中からドキュメンタリー番組一八本をリストにしたものである。これを見ると、やはり従来からのテレビの「八月ジャーナリズム」と傾向的にほぼ変わらないことが分かる。例えばNHKは六本のドキュメンタリーを放送しているが、このうち『NHK特集 爆心地・生と死の記録』（八月六日）は先述の

表 4. 1985 年 8 月（前半）に放送された戦争・終戦関連のドキュメンタリー番組

| 局   | 放送日  | 時間量 (分) | タイトル                                           |
|-----|------|---------|------------------------------------------------|
| フジ  | 8/3  | 80      | 日本・ポーランド合作ドキュメンタリー「かよこ桜の咲く日」                   |
| 日テレ | 8/4  | 55      | ドキュメント 85「天に焼かれる～被爆作家・大田洋子」                    |
| TBS | 8/4  | 54      | 報道特集「アンコール 汝の敵日本を知れ」                           |
| NHK | 8/4  | 45      | NHK 特集「海底の大和」—巨大戦艦 40 年目の鎮魂—                   |
| NHK | 8/6  | 75      | NHK 特集「爆心地・生と死の記録」                             |
| TBS | 8/6  | 54      | 終戦 40 周年特集<br>「媽媽！わたしは生きている・中国残留孤児、残留婦人の 40 年」 |
| テレ東 | 8/6  | 81      | 火曜ゴールデンワイド「欲しがりません勝つまでは・茶の間の太平洋戦争」             |
| TBS | 8/8  | 95      | ニイタカヤマノボレ・日本帝国の崩壊                              |
| NHK | 8/10 | 75      | ドキュメント「東条内閣極秘記録・密室の太平洋戦争」                      |
| 日テレ | 8/11 | 30      | 知られざる世界「両足をアメリカに捧げた！日系兵士の戦後 40 年」              |
| 日テレ | 8/11 | 55      | ドキュメント '85「歳月・ヒロシマ 40 年」                       |
| NHK | 8/13 | 75      | NHK 特集「人間のこえ・日米独ソ・兵士たちの遺稿」                     |
| TBS | 8/13 | 54      | 終戦 40 周年特集「ミステリー・帝銀事件」                         |
| NHK | 8/15 | 75      | 日本・戦後 40 年の記録「第 1 部・廃墟の中から」                    |
| NHK | 8/15 | 60      | 日本・戦後 40 年の記録「第 2 部・いま、豊かさの中で」                 |
| TBS | 8/15 | 88      | JNN ニュースコープ・スペシャル「終戦 40 周年特集」                  |
| TBS | 8/15 | 54      | 中村敦夫の地球発 22 時「戦争を歌った子供たち」                      |

ように原爆の被害の実相に迫る「受難の語り」の典型的な番組であるほか、『NHK 特集 人間のこえ 日米独ソ・兵士たちの遺稿』（八月二三日）も、六千万人に及ぶとされる第二次世界大戦での戦死者が家族や恋人などに残した手紙や手記の中から、「日米独ソの兵士四人の遺稿を取り上げ、戦争のむなしさ、残酷さを訴える」というもので、やはり「受難の語り」に該当する<sup>(4)</sup>。また終戦記念日（八月一五日）に第一部「廃墟の中から」、第二部「いま、豊かさの中で」あわせて一三五分に渡って放送した『日本・戦後 40 年の記録』は、タイトルの通り、敗戦後の混乱から復興し、高度経済成長を経て経済大国に成長した日本の戦後の軌跡を辿るという内容で「戦後史の語り」に該当する番組である。そして「加害」をテーマとした番組は、戦時中に南洋庁が置かれたパラオ諸島で進められた皇民化政策や「朝鮮人強制連行問題」を扱った

『JNNニュースコープスペシャル 終戦40周年特集』（TBS、八月一日）の一本のみという状況である。

このように一九八〇年代においてもテレビの「八月ジャーナリズム」では七〇年代以前と同様に「受難の語り」が中心で、「加害」は必ずしも積極的に取り上げられたわけではなかった。ドキュメンタリー番組について見てみると、一九八〇年代の一〇年間に放送された合計一二六本のうち明確に「加害」に関するテーマを扱っている番組は六本、情報番組やトーク番組などその他のジャンルを合わせても一本にとどまっている。しかし数こそ多くないものの、中には七〇年代以前に「加害」を扱っていた番組よりもさらに踏み込んで問題を掘り下げた番組や、戦時中の日本による侵略や支配についてアジアの人々の側の視点に立つて問い直すなど、これまでにない新しい視点で「加害」の問題に向き合おうとする番組が放送されていたことは注目される。

### (3) アジアから見た日本の戦争

そうした番組のひとつが、『NHK特集 太平洋戦争はどう教えられているか・アジアの教科書から』（NHK・一九八三年八月一日）である。この番組は、マレーシア、フィリピン、シンガポール、インドネシア、タイといったアジア諸国で戦争がどのように教えられているか、各国の教科書の記述と実際の授業の模様を取り上げたものである。これらの国々の歴史教科書の多くには「日本占領時代」という章や項目が設けられて詳細な記述がなされている。例えば、マレーシアの中等教育用の教科書には太平洋戦争の記述が一八頁に及んでおり、特に日本の占領期における日本化政策や民族ごとの分割統治に多くの頁が割かれている。番組では教科書の記述がしばしば引用される。マレーシアの教科書からは下記のような箇所が引用されている。



マラヤの人々が、最初に日本の残酷さを経験したのは、罪人を公衆の面前で処刑することであった。このような処刑があらゆる都市で行われ、人々の首は公共の場でさらされた。

日本軍がマレーシアを侵攻する以前から海外の華僑は日中戦争を応援するために、中国に資金提供していた。このような愛国心の現れが日本人の敵対感情を燃え上がらせた。そしてマレーシアが陥落したあと資金援助をしていた人の多くは殺害された。シンガポール、マレーシアで、およそ一〇万人以上の華僑が殺害された。



日本統治時代をテーマにした授業内（小学校）での役割劇の模様

『NHK 特集 太平洋戦争はどう教えられているか・アジアの教科書から』（NHK・一九八三年八月一五日）より

また、フィリピンの教科書では、一九四二年四月のバターン陥落とその後の有名な「バターン死の行進」で米兵捕虜やフィリピン人あわせて一万人以上が犠牲になったこと、日本の占領下の学校教育では日本語が必修とされ、教科書からアメリカやイギリスに関する記述、自由・民主主義といった言葉がすべて削除され、図書館から戦争を批判するような内容の本がすべて押収されたことなどが詳述されている。そして番組では、小学校の授業のなかで、日本軍が抗日ゲリラを匿うフィリピン人を虐殺する場面を再現する役割劇が行われる様子が取り上げられていた。このようにこの番組は、日本の視点ではなくアジア諸国の人々の視点から、アジア太平洋戦争やその中で

の侵略・占領統治がどのように記憶され継承されているのかを明らかにしようとしたものだった。

またNHKが一九八九年八月一四日から一七日までの四夜連続で放送した『NHKスペシャル 太平洋戦争とアジア』も、コンセプトとして「日本の視点で切る『終戦記念番組』が多い中で、アジアの目からみた戦争<sup>42</sup>、ニッポン<sup>43</sup>を、新たに発見された資料、現地の人々の証言などをもとに「問い直すということ」を掲げていた。その第一夜に放送された『NHKスペシャル 発掘幻の国策映画 日本占領下のジャワ』（八月一四日）は、日本統治時代のジャワで製作されたニュース映画・文化映画を取り上げて、アジアにとつての日本の戦争とは何だったかを問い直す番組であった。三年五カ月に及んだ日本のジャワ占領時代に、日本の国策を宣伝して現地の人々の協力を得るために日本軍が製作した一連のプロパガンダ映画は「幻のフィルム」といわれ所在不明になっていたが、オランダ国家情報局・映像資料館地下室で発見された。その数は八七本、上映時間にして一一時間に及ぶ。

番組では、様々な国策映画の内容が、当時の関係者の証言とともに紹介されていく。例えば、日本の統治下で小学校が国民学校と改称され、日本語、日本史、軍事教練、修身が必修とされるなど教育の日本化が進められていく様子を描いた映画、また東南アジア各地で空港や鉄道などの建設に従事する「労務者」ロウムシャ<sup>44</sup>への応募を呼びかける映画などである。そして次のような、実際に労務者として徴用された人達の生々しい証言が紹介される。

質問 …シンガポールに何人行きましたか？

証言者…村から三人行った。まるで動物のように扱われたよ

質問 …ボルネオには何人行きましたか？

証言者… 一緒に行ったのはシキット、マリマン、それにみんなで七人だよ。でも帰ってきたのは二人だけ。

証言者…日本人は残酷ですぐ殴りつけた。食べ物もひどかった。グちよつと来い、バカヤロウ…：そう言われるとひれ伏すしかなかった。病気になる、診療所に運ばれたが、二日ほどでみんな死んでしまう。埋葬しないうちにまた他の者が死ぬ。



日本化された教育を受けるジャワの子供たち

『NHK スペシャル 発掘幻の国策映画 日本占領下のジャワ』（一九八九年八月一四日）より

映画には、オランダの植民地支配からの解放を実現し独立をもたらすはずだった日本への希望が次第に失望へと変わり、人々が自力で独立を目指すとした動きも記録されていた。番組は次のようなナレーションで閉じられている。

日本の占領は三年五カ月に及びました。オランダの支配から日本の支配に移ったこの時代を、インドネシアの教科書は「ライオンの口から逃れ出て、ワニの口に投げ込まれた。そしてワニの支配は非常に残酷であった」と記しています。インドネシアの人々はこの時代を乗り越えて、独立を勝ち取りました。それは今回発見した宣伝映画に映されていないもうひとつの戦い

の歴史です。

また、四夜連続の「太平洋戦争とアジア」シリーズの二夜目に放送された『NHKスペシャル 戦犯たちの告白―撫順太原戦犯管理所1062人の手記』（一九八九年八月一五日）は、日本軍によるアジアでの残虐行為がどのようなものであったかを正面から掘り下げるものであった。番組では、終戦直後に捕虜となって中国の戦犯管理所に収容されていた一〇六二人の元日本兵達が書き残した手記の内容を紹介しつつ、その後日本に帰国した彼らが戦時中の自身の行為への罪の意識に苦しみながら、戦争とは何だったのかを問いつける姿を描いたものである。元日本兵達は撫順と太原の二か所の戦犯管理所に収容され、全員が戦時中の行動についてありのままに手記に記す作業を求められた。番組では、次のような手記の記述が紹介される。

俺が入隊する前の晩、おつかあは戦争に行っても罪のない人を殺すんじゃないぞと言った。おつかあの涙が俺の手に冷たく落ちた。しかし、俺は罪のない中国の人を殺した。天皇陛下の命令だ、そう言っておつかあのように腰の曲がった人を剣で突き刺した。（丸谷忠三さんⅡ元陸軍兵長の手記より）

それは初年兵教育を受けているときだった。両腕を縛られた中国の農民が連れられてきた。教官は「こちらは八路軍だ、今からこちらを皆殺しにする。戦地に来て人が殺せないようでは役に立たない、一人一回突け」と言った。なかなか突けないでいると教官が「意気地なし、それでも日本陸軍の兵隊か」と怒鳴った。くそつ、他

の奴に負けてたまるか、中国人を殺すことが正義なんだ、忠義なんだ、私は銃剣を構え、中国人の後ろからまっしぐらに突っ込んでいった。（溝呂木清さん＝元陸軍兵長の手記より）



陸軍第 59 師団が駐屯した山東省の町で地元の人に話を聞く元日本兵達

『NHK スペシャル 戦犯たちの告白―撫順太原戦犯管理所 1062 人の手記』（一九八九年八月一五日）より

理所を訪ね、当時を知る中国人の人々に話を聞いて回るといふ贖罪のための旅であった。このように、戦時中の「加害」に直接関わった当事者が登場して当時のことを詳細に証言するという内容の番組は、一九七〇年代以前には殆んどなかったものである。

以上のような番組は、それぞれ異なった仕方で戦争中の日本・日本人によるアジア諸国に対する「加害」をテーマとし、その真相や背景に迫ろうとしたものであった。そしてそれらは当時強まっていたアジア諸国からの対日批判とそれを受けた形で「加害」に対する日本国内における関心の高まりを背景としていた。こうした「八月ジャーナリズム」のなかでの「加害の語り」は、従軍慰安婦や徴用工の問題が顕在化し、社会的関



心や議論が高まった一九九〇年代に入ってより本格的に展開されていくことになる。

## 5. おわりに

本稿では、一九八〇年代におけるテレビの「八月ジャーナリズム」の展開、意義や問題点を分析してきた。その結果、テレビの成熟期といえる一九八〇年代にはドキュメンタリーがテレビの「八月ジャーナリズム」の主要ジャンルとなつて、その本数や番組一本あたりの長さ（時間）が増加していたこと、「八月ジャーナリズム」における最も主要なカテゴリーである原爆関連番組においては一九七〇年代以前と同様に、被爆の実相や被爆者の悲惨な運命や彼らの戦後を焦点化した番組が主流を占める一方で、一九八〇年代にリアリティをもつて論じられるようになっていた「全面核戦争」や「核の冬」を題材として扱い、より鮮明に「反核」のメッセージを発する番組が放送されるなど、原爆関連番組も時代の変化や国際情勢の変化を反映して、テーマ・内容が多様化していたことなどが明らかになった。また、一九七〇年代以前の「受難の語り」中心のあり方から、日本・日本人による特にアジア諸国に対する「加害」の側面をテーマとして取り上げる番組が徐々に増加し、「加害の語り」が形成されていったことも八〇年代の「八月ジャーナリズム」の特徴であることも明らかにした。七〇年代に萌芽的に形成された「加害の語り」では、八〇年代に入つて「第一次教科書問題」（一九八二年）や政治家の靖国神社参拝問題などを背景としながら、アジアの視点から戦時中の日本の支配・侵略や残虐行為の意味を問い直すなど、それまでにない新しいタイプの番組群が生み出されていった。

こうしてみると、テレビの「八月ジャーナリズム」にとって一九八〇年代は、幾つかの点において「転換期」として特徴づけられることが分かる。第一に、戦争を過去の「歴史」として掘り下げ、検証するような「長尺もの」のドキュメンタリーが「八月ジャーナリズム」の主流となったのが一九八〇年代であった。こうした流れは九〇年代以降、現代に至るまで継続されて、現代日本人の「戦争記憶」の形成に大きく関わってきたと考えられる。第二に、「八月ジャーナリズム」における「被害の語り」の中でも最も重要なジャンルであり続けてきた原爆関連番組は、戦後の「核」や「原子力」をめぐる国内外の情勢を背景としながら、徐々に扱うテーマが多様化していくが、そうした変化は八〇年代に現れ始め、九〇年代以降より顕著になっていく。第三に、日本・日本人によるアジアに対する「加害」を焦点化する「加害の語り」は、冷戦が終焉してアジア諸国の民主化の動きも加速した一九九〇年代において本格化し、質量ともにそのピークをなすことになる。一九八〇年代はそうした流れが本格的に生み出され定着していったという意味においても転換期であったと位置づけることができる。このように一九八〇年代を「八月ジャーナリズム」における転換期として位置づけながら、九〇年代との関係性および九〇年代以降の展開を検証していくことが今後の研究課題となる。

謝辞…本研究はJSPS科研費 JP17H06339の助成を受けたものです。また「NHK 番組アーカイブス学術利用トライアル（2019年度第3回）」の成果の一部です。

注

- (1) 形成期の「八月ジャーナリズム」については、有山輝雄「戦後日本における歴史・記憶・メディア」『メディア史研究』第一四号、二〇〇三年、佐藤卓己『増補 八月十五日の神話・終戦記念日のメディア学』筑摩書房、二〇一四年を参照。
- (2) 米倉律「八月ジャーナリズム」の形成―終戦期―一九五〇年代におけるラジオ、新聞による戦争関連報道の展開」『政経研究』第五六巻 第一号、二〇一九年七月。
- (3) 中村正則『戦後史』岩波書店、二〇〇五年、一六九―一七五頁。
- (4) 木村めぐみ「戦後日本の広告業の歴史におけるふたつの分岐点―停滞と危機の「本質」」一橋大学イノベーション研究センター、IIR Working Paper WP#13-20、二〇一四年一月。
- (5) 高平哲郎「『笑っていいとも!』が生まれた時代」市川哲夫編『70年代と80年代 テレビが輝いていた時代』毎日新聞出版、二〇一五年。
- (6) 読売新聞芸能部編、『テレビ番組の40年』NHK出版、一九九四年、六〇二頁。
- (7) NHK放送文化研究所編『テレビ視聴の50年』NHK出版、二〇〇三年、五六頁、六六―六七頁。
- (8) 本稿で使用するテレビの「八月ジャーナリズム」に関する情報は、新聞のラ・テ欄、テレビ専門誌の記事、NHK・民放各局のホームページなどから収集したものである。ニュース・情報番組については、内容の詳細が分からないことや、番組中の一項目などで放送していることが多いことから対象外である。新聞は朝日、読売、毎日の各紙のラ・テ欄、テレビ専門誌は『週刊TVガイド』『ステラ』など、NHKの番組確定情報はインターネット上に公開されている「番組表ヒストリー」(<https://www.nhk.or.jp/archives/chronicle/>、二〇一九年七月二四日最終閲覧)を参照した。対象はNHKと民放で全国放送された番組である。対象時期は、各年八月一日―一六日まで。ここでの「戦争・終戦関連番組」は、アジア太平洋戦争およびその戦後に関わるテーマを扱った番組、または「終戦記念特集」などと明示的なタイトルが付けられている番組を意味している。ただし、第二次世界大戦関連でも欧州を中心的に扱った番組は対象外とした。また、ニュース・情報番組のほか、放送時間が一五分未満のミニ番組、再放送番組(初回放送が二ヵ月以内のもの)についても対象外した(数ヵ月以上離れた時期ある

いは別の年に放送された番組の再放送は、番組編成の意図に鑑み対象に含めている。対象時期は、各年八月一日～一六日までとしている。

(9) 読売新聞芸能部編、前掲書、四七八～四九四頁。

(10) 『特別番組「ひろしま」』は、六日朝七時五十分からの三〇分番組として放送された。翌五九年からは『広島平和祈念式典』『原爆記念式典』などのタイトルで中継番組が定例化された。民放でも日本テレビやTBSが一九六〇年代前半から式典の中継番組や特別番組を編成するようになった（一九八〇年代前半まで）。一方、長崎の平和祈念式典の中継放送がNHKにおいて定例化されるのは二〇〇〇年からである。

(11) 米倉律、前掲、二一～三三頁。

(12) 一九七〇年代から九〇年代にかけて、日本・日本人による「加害」の側面を扱う「加害の語り」というべき記事や番組が比較的多く出現した時期がある。一九七〇年代における「加害の語り」の形成過程については、米倉律『戦争加害』という主題の形成―一九七〇年代におけるテレビの「8月ジャーナリズム」を中心に―『ジャーナリズム&メディア』Vol.13（二〇一九年九月）を参照。

(13) 「朝日新聞」「ラ・テ欄」一九八一年八月六日。

(14) 「週刊TVガイド」一九八五年八月三～九日号、一〇二頁。

(15) 「朝日新聞」「ラ・テ欄」一九八七年八月六日。

(16) 「朝日新聞」「ラ・テ欄」一九八七年八月六日。

(17) 「週刊TVガイド」一九八九年八月五～一二日号、八七頁。

(18) 宇吹暁『ヒロシマ戦後史 被爆体験はどう受けとめられてきたか』岩波書店、二〇一九～二二二頁。山本昭宏「反・核兵器から反・原発へ」斎藤美奈子・成田龍一編『一九八〇年代』河出書房新社、九九～一〇〇頁参照。

(19) 橋本明子『日本の長い戦後 敗戦の記憶・トラウマはどう語り継がれているか』山岡由美訳、みすず書房、二〇一七年、一七頁。

- (20) ジョン・W・ダワー『忘却のしかた、記憶のしかた 日本・アメリカ・戦争』外岡秀俊訳、岩波書店、一一八―一五一頁。
- (21) <http://www.worldvaluessurvey.org/wvs.jsp> (二〇一〇年一月一二日)。
- (22) <http://gallup.com.pk/wp-content/uploads/2015/12/1803151.pdf> (二〇一〇年一月一二日)。
- (23) 「読売新聞」一九九三年一〇月五日朝刊。
- (24) 牧田徹雄「日本人の戦争観と平和観・その持続と変化」『放送研究と調査』二〇〇〇年九月号。なお、二〇〇〇年調査では提示された意見は「先の戦争は、アジア近隣諸国に対する侵略戦争だった」というもので、それに対する賛否を問う質問であった。

(25) ジョン・W・ダワー、前掲書、一四四頁。

(26) 松井弘明「ソ連・東欧関係―BilateralismとMultilateralism」『ソ連・東欧学年報』一九八四年一九八四卷第一二二号参照。

(27) 「毎日新聞」「社説「ハイゼツ」を世界の言葉に―8・6にあたって提案する―」一九八一年八月六日。

(28) カール・セーガン『核の冬―第三次世界大戦後の世界』野本陽代訳、光文社、一九八五年。

(29) 「朝日新聞」一九八四年二月二五日朝刊。

(30) NHK、テレビオンタリオ(カナダ)、SVT(スウェーデン)、KBS(韓国)、テクニソノール(フランス)による国際共同制作番組。

(31) 日本放送協会編『20世紀放送史 下』NHK出版、二〇〇一年、二七七―二七八頁。

(32) 米倉律「戦争加害」という主題の形成―1970年代におけるテレビの「八月ジャーナリズム」を中心に―『ジャーナリズム&メディア』Vol.13、二〇一九年参照。

(33) 王雪半「教育・歴史教科書問題」東郷和彦・波多野澄雄編『歴史問題ハンドブック』一〇〇頁。

(34) 吉田裕『日本人の戦争観 戦後史のなかの変容』岩波書店、一八六頁。

(35) 波多野澄雄「近隣国条項」東郷和彦・波多野澄雄編、前掲書、岩波書店、一〇二頁。

(36) 石井明「靖国神社公式参拝」東郷和彦・波多野澄雄編、前掲書、六四頁。



- (37) 吉田裕、前掲書、一九〇頁。
- (38) 根津朝彦『戦後日本ジャーナリズムの思想』東京大学出版会、三一八～三二五頁。
- (39) 本研究ではテレビの「八月ジャーナリズム」の中にニュース番組を含んでいない。教科書問題をめぐっては内外から批判が高まっていた時期だけに、ニュース番組では活発に報道されていた可能性はある。
- (40) 「朝日新聞」「ラ・テ欄」一九八二年八月一五日。
- (41) 「朝日新聞」「ラ・テ欄」一九八五年八月一二日。
- (42) 『週刊TVガイド』一九八九年八月二一～一八日号、一二四頁。